Aβyātkār i Zarērān の宗教史的意義について

伊　藤　義　教

Aβyātkār i Zarērān 『ザレールの行伝』が中期イラーン，なかでもアルシャク王朝中葉以後からサーサーン王朝にかけて，その宗教・文化・言語ないし文学などの諸分野にわたって有する意義については古くからかなりに理解され，筆者もまた機会あるごとにそれらのうちのいずれかについて触れるところがあった（拙稿“ブンダヒシュン書の序・序章と etymologica Bundahišnica について”〔『西南アジア研究』No. 6〕；“Aβyātkār i Zarērān の詩形再構について”〔『言語研究』No. 44〕参照）。しかし一般的にいってこの書のもつ宗教史的意味はこれまでのところ，十分に解明把握されているとは言いがたい。今日残存している中期パルティア・ペルシア語書にして，本書のように純宗教的でなく，叙事文学的な性格を多分にもつものが，イラーンのイスラーム化に抵抗して伝持されたということは，本書がやはりそれなりに深い意味をもつものであることを予想させる。なるほど本書のもつ宗教史的意義もすでに指摘されてきた。それは要するにイラーンと塞外民族との闘争を Vištāsp 王という，親ザラスシュトラ教者と，Arǰāsp 王という，反イラーン・反ザラスシュトラ教者とのあいだの宗教戦争に托して叙事文学的に展開させたものだというのである。もちろん，それも誤ってはいない。アヴェスター書にすでに登場するこの二人物や，ウィシュタースプ王の王弟 Zarēr といって，Aβyātkār i Zarērān において陣頭指揮にあたる軍将も，Zairivairi の形でその名をアヴェスター書に連ねており，またウィシュタースプ王の賢知の宰相 J̌āmāsp は Dāǰāmāspa としてはやくすでにガーサーに登場しており，殊にかれと王とのあいだに交わされた問答は“預言の文学”として Aβyātkār i Žāmāspīk『ジャーマースプの行伝』その他をつくりあげている。こういった断片的な紹介だけでも Aβyātkār i Zarērān の宗教史的意義は容易に推知されよう。しかしそのような既知のデータに甘んじることなく，本書のもつこの方面の意義をさらに細部にわたって把握したいというのが，筆者の願いである。そうしてこそはじめてこの書のもつ宗教史的意義や，かかる叙事文学的作品が何故ザラスシュトラ教徒のあいだに伝存して今日に至ったか——その理由や根拠

の一端をもさらに鮮明にすることができると考える。そういう意味からここでは焦点を二箇所にしぼって，問題の所在を明らかにしたい。二箇所というのは一は §62，もう一つ，そして特に重要なものは §§ 17 b—21 である。

まず §62 であるが，流布本（J. Dastur M. JAMASP-ASANA: Pahlavi Texts I, Bombay 1897, pp. 1—16）にはつぎのようになっている：[1] pas Vištāsp-šāh apar χēzēt ut apāč ō kay-gās nišīnēt ut Žāmāsp i bītaχš ō pēš χᵛāδēt ut gōβēt ku ⁺amāh (t. šmāh) bāt ētōn čēγōn tō Žāmāsp gōβēh čē man diz-1 i rōδēn bē framāyēm kartan ut hān diz dar-band hān i āsēnēn bē framāyēm kartan avēšān pusarān ut brātarān ut vispuhrakān andar hān diz framāyēm kartan [ut] nišastan šāyēt ku ō dast dušmēnān nē rasēnd——“そこでウィシュタースプ王はたちあがり再びカイの王座に坐し，宰相ジャーマースプを前に召して言った「おんみジャーマースプの言われるように事態がわれらに起こるともよし，というのは，自分は一銅城を築かせよう，そしてその城に柵，しかも鉄のものを造らせよう。子らや兄弟らや王族らといったものたちをその城の中に入れさせよう。敵どもの手に落ちないことも可能です」と。”—— —— これは明らかに Var i Yamkart “ヤムのつくったワル”（いわゆるイラーンのノアの方舟）に範をとっている。アヴェスター書ウィデーウダート第2章以来，このヤム城は幾多のパフラヴィー語書に敷衍記載されている。ところで，このヤム城の意義が一種の終末観的なものとなって展開するのは，イラーン語文献の示すかぎりでは，パフラヴィー語書を待たねばならないが，しかしイラーン語以外の文献を援用することによって，ヤム城が当初から終末観的意義を有していたことを明らかにすることができる。イマ（ヤム）の治世は本来千年であるが，かれによる大地拡張の最終作業がおわって治世900年を経たとき，Dāityā 川のアルヤン流域，いわゆる Airyana Vaēǰah＞ Ērān-vēǰ において人天の集会が催され，その席上アフラ・マズダーがイマに気象の激変があることを予告し，これにそなえてワルを構築し，最上種の人・畜・火・植物を移し入れて種族保存をはかるの要を指示したので，イマはこれに従ってワルを構築した。しかしかれはアフラ・マズダーに罪を得て蒙塵，大海のほとりを彷徨し，Aži Dahāka のために Spityura によって殺される。アヴェスター原典はこの蒙塵を含む100年の数字を示さないが，これは疑う余地がない。百年は人寿としては長いかも知れないが，それほど長い年所でもない。ただその百年によってイマの千年紀が円成されるというところに意義がある。この百歳の意義は仏教経典においても指摘できる。特に経道滅尽後の百歳という表現などは，明らかに終末観的な意味において把握されねばならぬ。イマの場合は，

アヴェスター書そのものはこの百歳中にワルの構築されたことを推測せしめるのみで，このワルの開披がいつ行われるかを示していない。ただ気象上の悪条件が“諸冬”と表現され，豪雪のために諸所にいた庶類の三分の一のみ難を避けうるにすぎず(Vidēvdāt 2 23)，しかもその雪の溶解後は衆水大地に瀰漫して畜類の足跡もそのあとを絶つに至ることを謳っている（§§ 22—24）だけである。“諸冬”（§ 22）をザンドには註してMalkōsān gōβēnd“「マルコースの」と人びとは呼んでいる”と言っている。パフラヴィー語書は概して“マルコースの冬”といい，時には“マルコースの雨”ともいっている。この豪雪は罪穢を浄めるか，ないし罪を罰することをも目的としているようで，そのことは“このけがれた可見世界に”（§ 22)それが到来するといわれていることから明らかであり，その点，一種終末観的なものを想わせる。イラーンの豪雪は旧約聖書の大洪水とは異なって，一“終末時”に展開するのである。かかるイラーン的特色は Zand i Vahuman Yasn と同じように，いわゆる *Vištāsp-nāmak とでも称すべきものを典拠としているやにみられる Χρήσεις Ὑστάσπου からも明らかにされる。この *Vištāsp-nāmak『ウィシュタースプの書』からは上述した『ジャーマースプの行伝』も由来していると考えられている。Χρήσεις Ὑστάσπου『ヒゥスタスペースの予言』すなわち『ウィシュタースプの予言』はすでに散失しているが，Justinus (A. D. 150), Clemens Alexandrinus (A. D. 200) や Lactantius (A. D. 314)[2] によって知られており，その典拠とみられる『ウィシュタースプの書』はおそらくアルシャク王朝以前に溯りうるであろう。この間の事情，特にイラーン的背景については H. WINDISCH : Die Orakel des Hystaspes, Amsterdam 1929 (G. WIDENGREN : Stand und Aufgaben der iranischen Religionsgeschichte, Leiden 1955, pp. [62]—[63]; ditto : Iranisch-semitische Kulturbegegnung in parthischer Zeit, Köln u. Opladen 1960 p. 53 f.) ; Fr. CUMONT : La fin du monde selon les Mages occidentaux, *Revue de l'histoire des religions* CIII (1931) pp. 64—96 ; E. BENVENISTE : Une Apocalypse pehlevie, le Žāmāsp-nāmak, *ibid.* CVI (1932), pp. 337—380 (J. C. TAVADIA : Die mittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier, Leipzig 1956, p. 125) ; G. MESSINA : I Magi a Betlemme, Roma 1933, pp. 74—80 ; ditto : Libro Apocalittico Persiano Ayātkār i Žāmāspīk, Roma 1939, pp. 112ff. 等を参照したい。Lactantius と Aβyātkār i Žāmāspīk と Zand i Vahuman Yasn との間に多くの点において同一の表現が見られることは，すでにはやくから知られている。終末観的予言に関する部分について類文を例示してみると，Lactantius : Divinae Institutiones,

VII 16 col. 791, ll. 14—22 (J. P. MIGNE : *Patrologiae Cursus Completus* Tomus VI. Lactantii Opera Omnia I, Pari 1844) は evertentur (var. eruentur) funditus civitates, atque interibunt, non modo ferro atque igni, verum etiam terrae motibus adsiduis, et eluvie aquarum, et morbis frequentibus, et fame crebra. aer eim vitiabitur, et corruptus ac pestilens fiet, modo importunis imbribus, modo inutili siccitate, nunc frigoribus, nunc aestibus nimiis, nec terra homini dabit fructum : non seges quicquam, non arbor, non vitis feret. sed cum in flore spem maximam dederint, in fruge decipient. —— "国ぐには根柢から顚覆されるであろう，そして鉄と火のみならず，不断の地震，水の氾濫，屢次の疫病，度重なる饑饉によっても滅びるであろう。実に大気は汚染されて腐敗し病的となり，時には不適な雨，時には無用な乾燥，時には寒冷，時には過多の暑熱のために，大地も人間に果実を提供しないであろう：すなわち畑はなにものももたらさず，樹木もブドウもまたそうであって，これらは花に最大の希望をもたせるが，結実で（人を）欺くであろう" —— —— と言い，同じく VII 15 col. 786, ll. 15—16 には non fides in hominibus, non pax, non humanitas, non pudor, non veritas erit... —— "人びとのあいだには誠実も，誓約も，人道，謙譲も真実も存在しないであろう" —— —— という。Zand i Vahuman Yasn II 41—42[3] は § 41... aβr i kāmakkār ut vāt i artāy pat ōβām ut zamān i χᵛēš vārān kartan nē šāyēt § 42 ut hamāk asmān aβr nēzm šapēnēt hān i garm vāt ut hān i sart vāt rasēt bar ut tōhm i yavartāyān bē barēt vārān-ič pat hangām i χᵛēš nē vārēt hān-ič ⟨kē⟩ vārēt χrafstr vēš vārēt ku āp ut āp i rōtān ut χānīkān bē ⁺kāhēt ut aβzāyišn bē nē bavēt — "§ 41... （ザラスシュトラの千年紀の終わりの第10百年紀になると）自在な雲も正しき風も，おのが時と時節に雨を催すことができないであろう。 § 42 全天は雲が垂れこめて暗夜のごとくなり，熱風と寒風が吹き来たって穀物の実や種を奪い去り，雨もおのが時に降らず，降るものも水より害虫の方を多く降らし，河川や泉の水は減じて増量することはないであろう" —— —— と言い，同じく II 39[4] には…… gōβišn i dēn-burtārān muδr ⁺i vičurt dātβar i rāst gōβišn i rāstān ut hān-ič ⟨i⟩ ahravān hangēčēn-akān bē bavēt... —— "（マズダー）教を奉ずる人びとの言葉，正しい勝れた法官の印章，公証人たちの言葉および正信者たちのそれも争いのもととなるであろう" —— —— とか，II 29[5] には ut-šān pašt ut patmān ut rāstīh [nēst] ut aδvēnak nēst ut zīnhār nē dārēnd ut pat pašt kunēnd apar nē ēstēnd... —— "（同じ時にイ

ラーンに侵入する兇徒について言えば)かれらにはまた契約も約束も誠実も作法もなく，またかれらは保証を守らず，契約を結ぶもそれを履行しないであろう”—— —— とある。これに照応する Aβyātkār i Žāmāspīk XVI 12—14[6] には § 12 ut andarvāy ēšuftak ut sart vāt ut garm vāt vāzēt, ut bar i urvarān kēm bē bavēt, ut zamīk hač bar bē šavēt. §13 ut būm-čandak vasīkār bē bavēt ut vas āvērānīh bē kunēt. ut vārān apē-hangām vārēt ut hān kē vārēt apēsūt vārīh bavēt ut aβr apar asmān gartēt. §14 ut dipīr hač nipišt vat āyēt ut har kas hač guft ut gōβišn i nipišt ut patmān apāč ēstēnd. —— “§12 また虚空は顚倒し，寒風と熱風が吹き，草木の実は僅少となり，大地は果実をなくするだろう。§13 地震は数多く起こり多くの荒廃をもたらすであろう。雨は非時に降り，その降るものも無用の降雨となって雲は天上を去来するであろう。§14 また書記は書類をいつわって作成し，人びとはみな，書類や契約の文言に背反するであろう”—— —— とある[7]。このような出没異同を対照すれば，これらがいずれもイラーンの古い予言書に発していることを首肯することができるであろう。またこれを裏返しにして言えば，Lactantius: op. cit. のイラーン的背景を浮彫りにすることができると言えるであろう。今，このような終末観的類文に顧みつつ，Vidēvdāt 2_{23} に及ぶと，そこにはイマによるワル構築の機縁となる豪雪のために，庶類の三分の一のみよく難を避けるであろうとの予告がみえる。ところが Lactantius: op. cit., VII 15 col. 793, ll. 2—4 をみると，一“終末時”を叙して de cultoribus etiam Dei duae partes interibunt et tertia quae fuerit probata remanebit —— “神をあがめる人びとさえも，その三分の二は死し，難をまぬがれた三分の一は生き残るであろう”—— —— といっており，両者は全く符節を合している。(Lactantius は Divinae Institutiones の要約 Epitome の71章〔J. P. MIGNE: *op. cit.*, col. 1090, ll. 20—21〕では ita fere duas partes exterminabit, tertia in desertas solitudines fugiet. といってその時出現する暴君を主語としている[8]が，Divinae Institutiones の方が典拠に忠実であると考えられる。) probare (probata) とはパフラヴィー語 bōχtan (bōχt) と同一の概念を示し，災厄をのがれるとか罪なきあかしを得るということである。この Lactantius の文言から推測すれば，Vidēvdāt 書におけるワルのもつ役割がすでに終末観的なものであったことを推知しうるのであるが，果たせるかな，パフラヴィー語書に至るとこの点が端的に明瞭となる。例えば Aβyātkār i Žāmāspīk XVII 3—4[9]，Dēnkart 668_{16}—669_{3}[10] や Bundahišn 218_{12}—219_{5}[11] などを参照すれば足りる。要するに，終末の三つの千年紀中の第二の千年紀，いわゆる Ušētarmāh の千年紀

に悪魔 Malkōs が来て“マルコースの冬”を惹起こし，それが3年つづいたあと4年目にかれが退散しワルが開披して第二の創世がはじまるというのである。このようにみて来ると，ワルは終始，終末観的性格をそなえていたことがわかる，そして Aβyātkār i Zarērān §62 にみえる銅城には明らかにこのワルの Gegenbild がうかがわれるから，その銅城は本来は終末観的役割を負荷していたと見なければならぬ。この筆者による解釈は Aβyātkār i Zarērān §§17 b—21 によって，さらに裏付けされる。

まず §§17 b—21 を流布本についてみよう。けだし，この数節はヒョン王アルジャースプから二人の使節が王の親書をたずさえてイラーンのウィシュタースプ王のもとに来て，王にザラスシュトラ教を放棄するように迫り威嚇の言辞を盛ったその書簡を捧呈したのに対し，ウィシュタースプが王弟たる軍将ザレールをしてしたためさせた返書である。§17 b hač Vištāsp-šāh i Ērān dahyupat ō Arǰāsp i Xyōnān-šāh drūt §18 pat fratumīh nē amāh ēn dēn apēčak hilēm ut apāk šmāh hamkēš nē bavēm ut amāh ēn dēn apēčak hač Ōhrmazd patiγraft ut bē nē hilēm ut bē šmāh dutīkar māh χōnīh χᵛarēm §19 ānōδ pat Hutōs i Razūr ut Murv i Zartuštān kē nē kōf i burz ut nē var zufr bē pat hān dašt i hāmōn aspān tak paδakān vičārišn §20 šmāh hač ānōδ āyēt tāk amāh hač ētar āyēm ut šmāh amāh vēnēt ut amāh šmāh vēnēm §21 ut-tān nimāyēm ku čēγōn zat bavāt dēv hač dast yazdān —— “§17 b エランの大王ウィシュタースプよりヒョンの王アルジャースプへ。恙なかれ。§18 まず第一にわれらはこの清浄な教えを放棄しないし，また卿等と同信者となることもしない。そしてわれらはオーフルマズドからこの清浄な教えをうけたもの，（それを）放棄しないのみか，一月内に卿等の血をすするとしよう。§19 フトース林とザルトゥシュトのムルウにおいて —— それは高い山と深い渓がなくて坦々たる曠野，そこにおいてこそ騎馬と勇敢な歩兵が行動することができる。§20 卿等はそこ（すなわち貴所）から（かしこへ）行かれよ，さらばわれらはここから行こう。そして卿等はわれらに見え，またわれらは卿等に見えよう。§21 かくてわれらは，魔が神々の手によってどのように倒されるであろうかを，見せるとしよう。”——

—— このうちまず取り扱うべきは“フトース林”と“ザルトゥシュトのムルウ”である。“フトース林 (Hutōs i Razūr, あるいは Hutōs Razūr)”を Bundahišn K 20 folio 116, v. l. 7 (chapt. XXIV)[12]: ARUS i RAZUR RAZURĀN rat “Arus i Razur (“白林”) は林中のラト” によって J. MARKWART: Wehrot und Arang, herausg. von H. H. SCHAEDER, Leiden 1938, p. 155, n. 1 は Arus i Razūr と改読すべき

ことを提唱するとともに，loc. cit. c. n. 2 において Zand i Vahuman Yasn[13] ではこの戦闘の舞台が Spēt Razūr であることも指摘した。A. PAGLIARO : Il Testo Pahlavico Ayātkār-i-Zarērān, Roma 1925, p. 565=p. 16] c. n. b は Hutōs i Razvar とよみ，位置不明なるもマルウ平原らしいといっている。また E. BENVENISTE : Le Mémorial de Zarēr, poème pehlevi mazdéen, *Journal Asiatique*, t. 220 (1932) p. 257, n. 1 は Hutōs Razūr をむしろ Spēt Razūr "白林" の別称ではないかと言いながら，Arus i Razūr "白林" を採り，かつ詩形再構では後述するように，三転さらに Arus i Razvar としている。そこで Hutōs Razūr と同一視されもする Spēt Razūr "白林" とは何かといえば，いうまでもなく Spaētita Razura として Yašt 15_{31} に出てくるもので，Aurvasāra が Kavi Haosravah と馬車競争をするにあたって勝利を風神 Vāyu に祈ろうとしている地である。ところが，つぎの Yt. 15_{32} によると，祈願も空しく "汎アーリア林において (Vispe.aire Razuraya)" 逆に打ち負かされている。そうすると Spaētita Razura > Spēt Razūr"白林" と "汎アーリア林" は至近の距離にあったと推定することができる。こうした林を競争路にえらぶの風は Yt. 5_{50} に更に示唆に富む記載をみせており，Kavi Haosravah は九周林 (nava.frāδwə-rəsa- razura-) をこのような競争路とするさいに第一着になりたいと Anāhitā 女神に祈願をささげている。これは固有名詞ではなくして，九周して勝負を決する競争路のことである[14]。これに近い意味をもつ Nautaka ("九周，九匝") は Arrianos がソグドの地として挙げているところで (Anabasis Alexandri III 28 ; IV 18 —— アレクサンドロス大王がダーレヨーシュ三世を弑した Bessos を追うて進軍したことを叙する際に)，今日の Šahr i sabz (Balkh と Samarqand との中間) である。"白林" や "汎アーリア林" がこの地か，その近くにあったろうことは，これを推測するに足る根拠がある。たとい Hutōs < Av. Hutaosā を冠した林をただちにこの Spēt Razūr "白林" そのものと同定しないにしても，この種の東イラーン林中の一つとして，マルウ平原の東端に近く，Šahr i sabz 地区と近距離の地に同定することは，許されてよいように思われる。クールシュ二世の娘でダーレヨーシュ一世の妃となった Ἄτοσσα との関連を思わしめるこの名称を Vištāspa と結びつけて取り扱うことも課題となる (そういうさいの Vištāspa とはダーレヨーシュ一世の父で "東方" のサトラプに任じていた人物) が，しかしそれとともに Av. Hutaosā (Naotara 家の出) は Yt. 15_{35-37} において Kavi Vištāspa の妻とならんことを Vāyu 神に祈って聴許されている事実の方が，より注目さるべきである (Aβyātkār i Žāmāspīk XIV 7—8 参照)。筆者は Kavi Vištāspa

とダーレヨーシュ一世の父 Vištāspa との同定問題には触れずに，この Yašt の記載のみをもって，Hutōs Razūr "フトース林" がやはり Spēt Razūr "白林" と同定されうること，またたとい同定されなくても，それと遠くない地点にあったことを主張したい。従って "フトース林" をムルウ（マルウ）と併挙する Aβyātkār i Zarērān § 19 の立場は正当な根拠を有するものと考えざるをえない。それゆえに E. BENVENISTE: loc. cit. の Arus i Razūr なる改読もその必要がなく，また var と韻をふませる必要上 Razūr を Razvar として § 19 をつぎのように 6×5 と再構しているのも賛しがたい：

pat Arus i Razvar	Vers la Forêt Blanche
ut Marv i Zartuštān	et Marv la Mazdéenne,
kē nē kōf ut nē var	région sans mont ni lac,
pat hān dašt i Hāmūn	dans cette plaine de Hāmūn
aspān tak vičārišn	s'avanceront nos chevaux.

それに，この再構の難点はまだある。kōf i burz "高い山" が単なる kōf "山" になったり，var zufr "深い湖，溪" が単なる var "湖" になっているのも気がかりだが，hāmōn "平坦な" が Hāmūn（イラーン東部国境の大湖）と解釈されているのは最も不可で，これでは §19 の意味を全くくらましてしまうことになる。よって §19 は

Hutōs Razūr Murv Zartuštān
kē nē kōf burz ut nē var zufr
bē pat hān dašt⟨ē⟩ i hāmōn
aspān paδakān vičārišn
フトース林とザルトゥシュトのムルウとは
山高からず溪浅し。
陵夷の野なるかしここそ
動かしやすの騎馬に兵。

と 8×4 に再構すべきである。また Murv すなわち Marv は例の Vidēvdāt 1 にみえる，いわゆる "州郡誌" では，1. Dāityā 河の Airyana Vaēǰah（上掲 p. 94），2. Gavā（Arrianos: op. cit. IV 17 の Gabai。かれはこれをマッサゲタイとの国境にあるソグド地域においている）についで第三位を占め（Vid. 1_5），アフラ・マズダーは "堅固正信のモウルを（Mōurum sūrəm ašavanəm）" 創造したとあり，ザンドにはこれを Marv i aβzār [+hambūt] ahrav [pat kār i dātastān ut kartār ku-š vas

andar kunēnd〕[15] —— "強き〔堅固な〕,〔律法の課することに〕正信〔かつ実践的な，すなわちそこでは多くの人びとがそれを実践しているところの〕Marv" —— —— と訳註し，また Bundahišn 205_{15} [11] も Marv i kartār ku-š kār 〈i〉 dātastān vas +andar kunēnd "実践的なる，すなわちそこでは多くの人びとが律法の課することを実践しているところの Marv" といっている。それ故に Murv i Zartuštān "ザルトゥシュト＝ザラスシュトラの（教えを奉ずる）Murv" の表現は正鵠を得ている。それとともに Bundahišn 206_1[11]: spāh-ravišn vēš mat "(Marv には) 軍勢の進出がたびたびあった" という文言も行兵の不便でないことを裏書きしている。そしてこれらザラスシュトラ教有縁の地は dašt i hāmōn "平坦，陵夷の野" で "高山深溪なく"，かつそこで "神々の手によって魔が打倒される" と §§ 19. 21 は言っているが，これは何を意味しているのであろうか。

もちろん，ここにみえる描写は実際の地形に即したものではあるが，決してそれのみにとどまるものでもない。この点については，Bundahišn 228_{1-5}[11] を参照する必要がある。これは最後の総審判が行われて永生の世界が出現するときの状況を記したものである：hān zamīk 〈i〉 dōšaχᵛ apāč ō frāχᵛīh i gēhān āβarēnd ut bavēt fraškart andar +aχᵛān pat kāmak [i] gēhān amarg tāk hamē-hamē-ravišnīh ēn-ič gōβēt ku ēn zamīk hāvsār ut anišēp ut hāmōn bē bavēt kōf-čakāt ut gavr ut ul dārišn ut frōt dārišn nē bavēt —— "かの地獄の土は世界を拡げるために持ちかえられ，そして両世界において建直しが起こり，（可見）世界はその願い通りにいついつまでも不死となろう。またこういうことも（教典に）述べられている「この大地は一様で無傾斜かつ平坦（hāmōn）となり，山の峯と溪（gavr），隆起と陥没はなくなるであろう」と。" —— —— これによると，世界の拡張ということは上に出した Vidēvdāt 2 においてイマがマズダーの指令をうけて実行したところで，いうなればこの Bundahišn 句は終末時におけるその回帰である。創世時や黄金時を終末時に再現する回帰的手法はザラスシュトラ教にみられる常套的現象で，珍しいことではない。われわれはその後に顕現する世界の描写の方に，より注目する必要がある。浄土教経典においては仏国土に高山や井谷等がなく地，平正であるとされていることは人の知るところである。この類似現象を追究することは今は避けて，かかる信仰がイラーンのものともして早くから知られていたことに注意を喚起したい。Plutarchos: de Iside et Osiride 47 (C. CLEMEN: *Fontes Historiae Religionis Persicae*, Bonn 1920, p. 49, ll. 2—7) によると，決定的の時が来てアレイマニオス(＝Arəra Mainyu) は疾病と飢餓をもちこむが却ってその

ために死を余儀なくされて消え失せ，“地は一様かつ平坦となり，全人類は至福になって同じ言語を用いるものとなり，一つの生活と一つの政府をもつこととなろう（*τῆς δὲ γῆς ἐπιπέδου καὶ ὁμαλῆς γενομένης, ἕνα βίον καὶ μίαν πολιτείαν ἀνθρώπων μακαρίων καὶ ὁμογλώσσων ἁπάντων γενέσθαι*）”とある。ēn zamīk hāvsār ut...hāmōn bē bavēt は全く *τῆς...γῆς ἐπιπέδου καὶ ὁμαλῆς γενομένης* と同一である。また *ἀνθρώπων... ὁμογλώσσων ἁπάντων γενέσθαι* は Bundahišn 225_{15--16}[11]：martōm hakanēn hamvāng bavēnd “全人類は同じ言語を用いるものとなろう” と全く同一であり，もってプルータルコスの記載を高く評価するに足るであろう。その他，世界の終末にあらわれる諸奇蹟についてしるす点も両書は幾多の類似点を有しているので，散失した Spand Nask の系統に属するものが共通の典拠となっていたことを思わしめる。そしてその典拠のアルシャク王朝時代以前にも溯りうることはこれまた，疑う余地がない。これは今日の常識である。とすれば，Aβyātkār i Zarērān §§19. 21 の宗教史的意義について，もはやわれわれにはただ一つの結論しか許されていない。それは，本書がこの二節ならびに §62 においてもこのような古いイラーンの伝統，ザラスシュトラ教的伝統に立脚し，現実に展開したであろう事象に終末観的賦彩を試みたものだという点にある。従って本書においては，本来，終末観的であったものが故意に現在の時点に移されるとともに，ザラスシュトラ教の故土ともみられる東イラーンにそれが定着させられたかの観を呈しているのである。かかる作業はマグシュ祭司の手を経たものであり，従ってわれわれの Aβyāthār i Zarērān がかれらの刪定を経たものであることはいうまでもない。この視点に立って §24 をみるとき，マグシュ祭司に兵役義務の免除を謳っている部分もまた古くから本書の一部を構成していたものと見るべきであり，これを詩に再構するさい，E. Benveniste：op. cit., p. 259 のように āp “水” すなわち Anāhīt 女神を削除することも首肯しがたい。これについては拙稿 “Aβyātkār i Zarērān の詩形再構について”（『言語研究』No. 44）に詳論するところがあるから，参照願いたい。

この小論を終えるにあたって，Aβyātkār i Zarērān 中，上に引用した諸節を筆者の主張に従って詩形に再構すれば下のごとくになる。§20 のみ 6 音節詩行で，他はすべて 8 音節詩行（一部に破調を含む）をもって詩頌を形成している。

§ 62	pas Vištāsp-šāh apar χēzēt	ここにウィシュタースプ王たちあがり
	apāč ō kay-gās nišīnēt	復たカイの座に坐したまい
	Žāmāsp bītaχš ō pēš χᵛāδēt	相ジャーマースプ前に召し
	ut gōβēt ku +amāh +bavāt	さて言う「われらに事起これ

	ētōn čēγōn Žāmāsp gōβēh	ジャーマースプの言うごとく。
	diz rōδēn framāyēm kartan	銅城われら築かしめ
	ut hān diz dar-band āsēnēn	城には鉄の柵をしも。
	avēšān +puhrān brātarān	かの子らとはたはらからと
	ut +vispuhrān andar hān diz	さては王族をその城に
	framāyēm kartan nišastan	入れてぞわれらおかしめば
	ō dast dušmēnān nē rasēnd	敵手に落つることなけん。」
§ 17	hān i taχm spāhpat tak Zarēr	勇将おおしきザレールは
	passaχ^{v} ōγōn framūt kartan	かくとし返書つくらしむ
	ku hač Vištāsp Ērān dahyupat	「エランの大王ウィシュタースプゆ
	ō Arǰāsp i Xyōnān šāh drūt	ヒョンの王なるアルジャースプへ。恙
§ 18	fratum nē amāh ēn dēn hilēm	まず教われら棄てさらず　〔なかれ。〕
	apāk šmāh ham-kēš nē bavēm	御身と同信たることもせじ。
	ēn dēn hač Ōhrmazd patiγraft	この教主より受けたれば
	ut bē nē hilēm ut bē šmāh	棄てざるのみか，おんみらの
	dutīkar māh χōnīh χ^{v}arēm	血をこそ飲まめ，月内に。
§ 20	šmāh hač ānōδ āyēt	卿等は貴所より行けよかし
	tāk amāh hač ētar	さらばわれらはここよりす。
	ut šmāh amāh vēnēt	卿等われらに見ゆれば
	ut amāh šmāh vēnēm	われら卿等に見えなん。
§ 21	ut-atān nimāyēm čēγōn	神の御手にて魔の打たる
	zat bavāt dēv hač dast yazdān	さまをぞ卿等に示さなん。」

（筆者は京都大学文学部講師）

註

1) ウズワーリシュンの表示はすべて中止した。また +，〈 〉，［ ］はそれぞれ改読，補入，削除を示すが，〔 〕については尚お註15を参照のこと。訳文中の（ ）は筆者が原典にないものを加えたり，原典を要約したりしたことを示す。

2) Lactantius より少しあとに Ammianus Marcellinus : Res Gestae XXIII 6 もまた χρήσεις によって Vištāspa/Hystaspes の生涯を叙している。

3) 本書の章・節のわけ方は E. W. WEST : Pahlavi Texts I (SBE. vol. V) Oxford 1880,

pp. 189—235 により，またテクストは Codices Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis Vol. I : The Pahlavi Codices K 20 & K 20b, Copenhagen 1931 (以下単に K 20 と略記) を底本として校定した。ただし，註においてはこの写本中の当該箇所と Kaikobâd Âdarbâd NOSHERWÂN : The Text of The Pahlavi Zand-i-Vôhûman Yasht, Poona 1899 の章・節とを併記することにした。——K 20 folio 134, r. 13—19=Nosherwân IV 42—45.

4) K 20 f. 133, v. 18—20=Nosherwân IV 37.

5) K 20 f. 132, v. 4—6=Nosherwân IV 11.

6) G. MESSINA : Libro Apocalittico Persiano Ayātkār i Žāmāspīk, Roma 1939.

7) なお II 31—32=K20 f. 132, v. 13—133, r. 3=Nosherwân IV 16—20 をも参照。II 32 =K20 f. 132, v. 20—f. 133, r. 3=Nosherwân IV 20 は人間がさらに矮小となる云々といって仏典と比較さるべきものを示唆する。

8) "Thus he will exterminate two parts of mankind ; the third will fly for refuge to desert places." (E. H. BLAKENEY : Firmani Lactantii Epitome Institutionum Divinarum—Lactantius' Epitome of The Divine Institutes. Edited and translated with a Commentary by——, London 1950 p. 122. この Commentary においてはイラーン的背景については何ら触れていない。)

9) 註 6 参照。ただしここはパフラヴィー語文を欠きパーザンド文で伝存している。MESSINA は J. J. MODI : Jâmâspi. Pahlavi, Pâzand and Persian Texts...., Bombay 1903, p. 73, l. —5, w. 3～p. 74, l. 2, w. 4 によって Pāzand text をかかげ Pahlavī 語に再構している。

10) テクストは The complete Text of the Pahlavi Dinkard....under the supervision of D.M.MADAN, Part II, Bombay 1911 (いわゆる DkM.)。付記した数字はページと行数。

11) The Bûndahishn. Being a Facsimile of the TD Manuscript No. 2 brought from Persia.... Edited by Ervad T. D. ANKLESARIA...., Bombay 1908 (いわゆる IrBd., GrBd. または BdA.). 付記した数字はページと行数。

12) ここの Bundahišn はいわゆる IndBd. または BdK. で，註 11 のとは異なる。K 20 については註 3 参照。

また以下に展開する筆者の本論中，各著者によるパフラヴィー語のそれぞれの読み方は，統一をはかるために，筆者風に多少とも潤色されているところがある。

13) III 9=K20 f. 137, v. 6—14 (このうち l. 10 に Spēt Razūr がみえる) =Nosherwân VI (8), 9, (10).

14) はやく E. HERZFELD : Altpersische Inschriften, Berlin 1938, p. 170 によって指摘された。尚おこれに関する一般的状況や，つぎに出る Nautaka については W. HINZ : Zarathustra, Stuttgart 1961, p. 31, c. nn. 43—45 参照。

15) 特にここの〔 〕はザンド中の註にあたる部分を示し，訳文中にもそれを採用した。